

令和 5 年度 学校評価シート

学校名：県立南紀はまゆう支援学校

校長名：小 原 美佐香

目指す学校像・育てたい生徒像（スクール・ポリシー等に基づいて記載する）

- ・児童生徒の発達の段階や障害の特性等に基づき、個々の教育的ニーズに対応した指導・支援を行うとともに、保護者や地域の期待に応え信頼され、地域における特別支援教育の専門性を生かしたセンター的機能を担う学校。
- ・自立と社会参加を目指し、仲間や、支援者、地域の人々とともに心ゆたかにたくましくいきいきと生きる児童生徒

学校評価の公表方法

- ・本校ホームページにて公表する。

現状・進捗度

A	十分に達成している。	(80%以上)
B	概ね達成している。	(60%以上)
C	あまり十分でない。	(40%以上)
D	不十分である。	(40%未満)

自己評価（分析、計画、取組、評価）

番号	計画・取組				評価（2月6日現在）		
	重点目標	現状	具体的取組	評価項目と評価指標	進捗度	進捗状況	今後の改善方策
1	児童生徒一人ひとりの教育的ニーズを踏まえ、自立と社会参加を実現するための授業を実践する。	B	毎週1回「15分授業改善」の時間を確保する。	授業改善シートを効果的に活用する。	B	年間通じて、週1回取り組み、定着してきた。	本校の望む児童生徒像の育成にむけた教育活動の実践の方向性を共有した上で、学年間、学部間接続を考慮し、中核となる教科の系統性について研修を行う。
			学習指導要領を踏まえ、授業を展開する。	全校研修と授業づくりが連携し改善につながっている。	B	外部講師、指導主事を招聘し、授業改善につながった。	
			効果的な教育課程のPDCAサイクルを実現する。	算数・数学の単元配列表を作成する。	B	教科の順序性、系統性、バランスについて研修できた。	
2	児童生徒の健康の増進及び安心・安全な教育環境の整備を図る。	C	ヒヤリハット報告を全教職員で共有し危機管理意識を高める。	事故の状況と原因を理解し、未然防止に努めているか。	B	職朝を活用し、迅速に周知を図ることができた。	新校舎、グラウンドでの学習活動においては、常に危機管理意識を高め、ヒヤリハット事案については、迅速に職朝で、全教職員で共有し、再発防止に努める。
			健康教育や医療的ケア等に関する取組を整える。	定期的に各種委員会を行い、外部機関と連携し検証する。	B	ミキサー食注入は、関係機関と連携し安全に実施できた。	
			計画的、組織的に防災学習を実施し、全校での訓練を行う。	防災に関する備えを整えることができたか。	B	年間2回の全校避難訓練、外部講師による防災学習を行った。	
3	センター的機能を充実させるとともに地域に開かれた学校づくりを推進する。	C	校区内の学校や関係機関と協働して支援を行う。	地域において特別支援教育の啓発活動を実施している。	B	夏季研修会、コーディネータによる研修支援を実施した。	教育支援部を中心に地域の小、中、高等学校での研修支援や本校での夏季研修会、教育相談、支援だよりの発行を活用し、特別支援教育のセンター的機能を発揮する。
			HPや各種配布物を通して地域に発信する。	年間15回以上の情報発信の機会を設定している。	B	開校式や高等部の学習活動等地元紙で発信できた。	
			4校連携における聴覚支援体制の確立を図る。	きこえとことば・見え方相談会の充実を図る。	B	4校で連携し、情報共有を行い、円滑に実施できた。	
4	地域と連携し、協働できる取組を推進する。	C	地域の人材を外部講師として招聘する。	地域の外部講師を年間3回以上招聘している。	B	進路学習、各学部での教科学習で積極的に招聘できた。	地域の外部講師の授業を継続的、計画的に行い、学びの充実を図るとともに、学校運営協議会では、分科会形式を継続し、学校課題について具体的に各担当が協議し、解決に向けて取組をすすめる。
			学校運営協議会と連携し、分各掌と協力して学校課題の解決を図る。	学校課題を解決またはその方向性を確認する。	B	分科会形式で、具体的な内容について協議している。	
			地域資源を活用した教育実践を行う。	計画的に地域の人々との授業を実践する。	C	高等部の作業学習を中心に地域への発信を行っている。	

学校関係者評価（2月6日実施）

- 南紀支援学校とはまゆう支援学校が統合し、運営する中で、安心して学校生活を送れている。教職員の努力と保護者の協力のもと、一致団結して取り組むことができている。基幹相談センターとしても、卒業後も円滑に支援できる体制を整えていきたい。
- 学校の発信力は向上しているが、外部の方の学校への関心はまだまだ低いため、広報のガイドラインを作り、地域の方々との関係性を考えて、広報誌等作成していく必要がある。
- 地元の方々や市町村を越えた方々にも特別な支援を必要とする児童生徒、関係者の方々に来校いただけるようアクセスも含めて考えていきたい。
- 医療的立場の視点からすると、学校は教育の場でもあり生活の場でもあるため、医療的な視点と学校生活の視点からの意見交換をし、子どもたちのよりよい充実した生活に繋げていきたい。
- ベテラン教員と若手教員への指導経験の伝達・継承が大きな課題である。今後も引き続き、初任者に対する支援の充実を図る必要がある。
- 南紀支援学校が培ってきた肢体不自由教育の専門性とはまゆう支援学校が培ってきた知的障害教育、聴覚障害教育の専門性の融合を大切にしていきたい。また、生徒数が少ない聴覚障害教育や肢体不自由教育の専門性の維持・継承については課題である。

